

# コミュニティ感覚の研究動向

目 黒 達 哉

## I はじめに

筆者は、「臨床心理地域援助における傾聴の意義」「カウンセリングにおける傾聴に関する研究」など「傾聴」に関する研究テーマに取り組んでいる。特に、今後は、傾聴体験がコミュニティ感覚に与える影響について検討したいと考えている。筆者が取り組んでいるこれらの研究は、コミュニティ心理学が基盤となっている。コミュニティ心理学の研究課題の一つにコミュニティ感覚がある。そこで、国内外のコミュニティ感覚の先行研究を紹介し、コミュニティ感覚の研究動向について検討したい。本稿は文献レビューである。

コミュニティ心理学の研究課題には、以下のような項目が挙げられる。

- ①危機介入
- ②コンサルテーション
- ③社会的援助組織作りの方法
- ④予防
- ⑤環境問題
- ⑥エンパワメント
- ⑦コミュニティ感覚
- ⑧コミュニティ・カウンセリング
- ⑨生態学的視座
- ⑩ボランティア

①社会変革

などさまざまである。上述した項目からも分かるように、コミュニティ心理学の研究課題の一つにコミュニティ感覚が位置づけられている。

II 海外研究動向

1. コミュニティ感覚の定義・測定尺度とさまざまな研究

コミュニティ感覚について、最初に定義したのは、Sarason (1974) である。

Sarason (1974) の定義は、以下のように定義されている。

「他者との類似性の知覚、他者との相互依存的関係の承認、他者にしてほしいと期待することを、自分が他者に与えたり行うことによって、その相互依存的関係を積極的に維持しようとする意志、そして自分は依存可能で安定したより大きな構造の一部であるという感覚である」

その後、Sarason の定義を基にして、McMillan & Chavis (1986) によって検討が加えられ、以下のように再定義がなされた。

「メンバーが持つ所属感、メンバーがメンバー同士あるいは集団に対して持っている重要な感覚、また、集団とともにコミットメントすることによってメンバーのニーズを満たすことができるという信念の共有」

さらに、コミュニティ感覚尺度の開発研究がなされ、「Sense of Community Index (SCI)」が作成された。構成要素としては、①メンバーシップ、②影響力、③統合とニーズ、④情緒的結合の共有を挙げている。

McMillan & Chavis (1986) 作成の SCI は、4つの要素の独立性と妥当性が実証研究の中で必ずしも一致しないとする研究がなされ、Chavis ら (2008) によって改訂 SCI-2 が作成された。

その他さまざまな研究が行われている。例えば、Obst ら (2002) は比

較的メンバーの数が少ない小さなコミュニティにおいてコミュニティ感覚が高いこと、また Chavis ら (1986)・Pretty ら (1994) はコミュニティでの居住年数や関わり長さなどの時間的要因もコミュニティ感覚に影響することを報告し、さらには Dalton ら (2001) によってコミュニティにおける人種・民族的状況、居住形態、所得レベル、年齢や教育歴、人格特性などとコミュニティ感覚との関連も認められている。

Royal & Rossi (1996) は、職場における研究を展開している。職場においては、コミュニティ感覚の高さが職場での満足度の高さと、役割葛藤の低さと関連していることを述べている。

Hombrados-Mendieta, Dominguez-Fuentes, Garcia-Leiva, & Gomez-Jacinto (2013) はスペイン移住者を対象に調査し、コミュニティ感覚が上がると人生の満足感 (satisfaction with life) も高くなっていることを報告した。

## 2. Paul Speer のコミュニティ感覚に関する研究

ここで、Paul Speer とその共同研究者らの研究を紹介する。これらの研究は日本ではあまり目に触れない。彼らの研究は政治学の傾向が強いためか、日本のコミュニティ心理学者は、引用・参考文献として取り上げていないようである。そこで、筆者は Paul Speer らがコミュニティ感覚と心理的エンパワメントの関連性について興味深い示唆を与えているので、ここに年代順に紹介し、研究動向を整理したい。

Joseph Hughes, Paul Speer, N. Andrew Peterson (1999) によって、コミュニティ組織を測定するためのコミュニティ感覚尺度が開発された。4つの因子からなり、組織、調停者、コミュニティ組織への影響、コミュニティに付着の影響と組織との関係であった。2つの研究により尺度の次元、信頼性、妥当性が調査された。研究1では3つのコミュニティ組織と4つの因子からの参加者の合計 218 名で実施された。研究2では5つのコ

コミュニティ組織から実施された。参加者はアフリカ系アメリカ人 48%、白人 42%、ラテン系アメリカ人 6%、その他 3%であった。その内女性は 69%、男性は 31%であった。その結果、3つの因子が確認され、それは組織、調停者、コミュニティに付着の影響と組織との関係であった。

また、Douglas Perkins, Joseph Hughey, Paul Speer (2002) は、過度な社会的結合はディスエンパワとなる。社会的結合を強調するのではなく、ネットワークづくりをすることを強調すべきであると述べている。

Joseph Hughey, Paul Speer (2002) は、「Sarason の観察、心理学者は心理学的コミュニティ感覚の多くのモデル開発し、コミュニティ感覚尺度を考案した。この尺度の開発によって心理学的理解が深まった。しかし、個人とグループ経験に強く影響するコミュニティ、社会的現象を無視している。この観察は新しくない。」と述べている。これに関連して、N. Andrew Peterson, Paul Speer, Joseph Hughey (2006) は、コミュニティ感覚尺度 (SCI) は、否定的な項目を削除して改訂すべきと積極的に新しいアイテムを開発し、テストする必要があることを示唆した。

N. Andrew Peterson, Paul Speer, Joseph Hughes (2008) は、コミュニティ感覚 (4 因子: relationship to organization, organization as mediator, influence of the organization, and bond to community) は「心理的エンパワメント」「コミュニティ参加」「組織関与」に正の相関があることを報告している。また、N. Andrew Peterson, Paul Speer, David W. McMillan (2008) は「コミュニティ感覚 8 項目短縮版」の作成をした。その結果、「コミュニティ参加」「心理的エンパワメント」「メンタルヘルス」と正の相関、「抑うつ」と負の相関があることが分かった。

Lindsay A. Wilke, Paul Speer (2011) は、コミュニティ組織のメンバーの心理的エンパワメントの過程は、組織の要因によって強く影響されることがあると述べ、都市住民のランダムなサンプル 974 名を調査した。構造方程式モデリングは関係力の媒介関係を強調している (構造方程式モデリング (Fig 1): 「関係力」←「コミュニティ感覚」←「組織の特徴をエンパ

コミュニティ感覚の研究動向

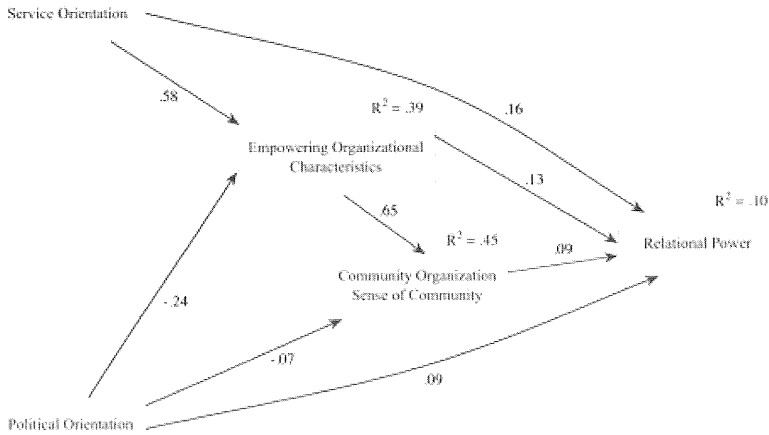


Figure 1 : Mediation model for relational power.

(Lindsay A. Wilke, Paul Speer, 2011)

ワすること」←「サービス志向」。

Paul Speer, N Andrew Peterson, Theresa L Armstead (2012) は、コミュニティ感覚は「interactional 心理的エンパワメント」に正の相関があることが示された。ただし「intrapersonal 心理的エンパワメント」については低中収入層においてのみ相関があることが分かった。

以上の論文から、Paul Speer らの研究の特徴は大規模な現地調査であることが分かり、コミュニティ心理学者らしさが表れている。Paul Speer らの研究からコミュニティ感覚に関連する個人差変数については、あまり検討されていないようである。また、Paul Speer らの研究から「心理的エンパワメント」という性格ないし信念は、コミュニティ感覚に関連しているとみているようである。

Paul Speer らは心理的エンパワメントを「intrapersonal エンパワメン

ト」と「interactional エンパワメント」を考えている。

Paul Speer らは「intrapersonal エンパワメント」に関して、具体的に次のような項目を考えている。

- ①私はしばしばグループリーダーに選ばれる
- ②私は人についていくよりも人をひっぱっていく方が好きである
- ③私は人をまとめながら事を進めていくことができる
- ④私は政府に言いたいことがたくさんあるので、政治に参加するのが楽しい
- ⑤私のような人が政治や行政に関与するのにふさわしいと思う

などがあげられている。

また、「interactional エンパワメント」に関しては、具体的に以下のよ  
うな項目を考えている。

- ①コミュニティを向上させるためには、個人で動くよりも集団で動く  
方が効果的だ
- ②コミュニティを変えるときには、ほとんどいつも葛藤が生じる
- ③コミュニティに影響力をもっている人は、ニュースを通して多くの  
問題をもち続ける

などの項目があげられている。

そこで、Paul Speer らが心理的エンパワメントについてどのような研  
究をして来たのかを紹介したい。

Paul Speer, Joseph Hughey (1996) は、コミュニティ組織のメンバー  
間での参加型体験の報告をした。それによると心理的エンパワメントのパ  
スモデルを検証した。コミュニティ組織の関係特性が認知されたとして参  
加、知覚組織力と心理的エンパワメントに外因性を仮定した。代替モデル  
が知覚された組織的親交と心理的エンパワメントと知覚組織規定と組織力

## コミュニティ感覚の研究動向

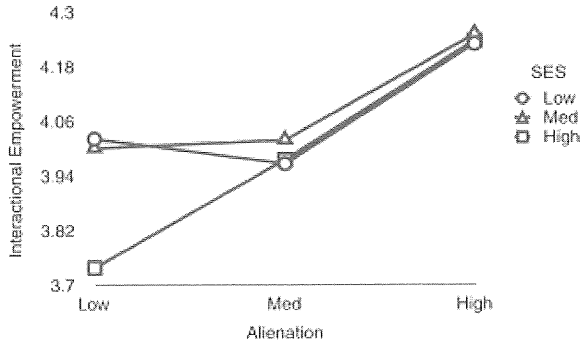


Figure 2 : Interaction between alienation and socioeconomic status on the interactional component of psychological empowerment

(Brian D Christens, Paul Speer, N. Andrew Peterson, 2011)

の認識の間に逆関係が再現された。

また、「知覚された組織の特徴」は心理的エンパワメントに関連していた (N. Andrew Peterson, Paul Speer 2000)。

Paul Speer (2000) は「intrapersonal 心理的エンパワメント」のハイレベルの人は地域社会活動に参加する頻度が大であること、「interactional 心理的エンパワメント」のレベルの高い人は低い人より組織活動への参加をし、コミュニティ感覚が強いことを報告した。

社会政治的コントロールスケール (SPCS) は、心理的エンパワメントの個人内の構成要素に広く使われる指標である。SPCS-R が改善されたモデルの適合性を得られた尺度の改訂版かどうかの確認因子分析 (CFA) を行った。サンプルとしては、中西部米国の 316 人、北東米国の 750 人のそれぞれ無作為に選ばれたコミュニティ居住者であった。否定的表現項目の使用が SPCS の因子構造に大きな影響があることが分かった。SPCS-R は否定的表現項目を肯定的表現項目に言い直された。SPCS-R の CFA では 2 つの因子構造 (リーダーシップ能力、ポリシーコントロール) が抽出された。SPCS-R 下位尺度の信頼性とコミュニティ参加に関連があった

(N Andrew Peterson, John B Lowe, Joseph Hughey, Robert J. Reid, Marc Zimmerman, Paul Speer 2007)。

また、コミュニティ参加は心理的エンパワメントに影響するが、逆は無いと報告している (Brian D Christens, N Andrew Peterson, Paul Speer, 2011)。

「interactional 心理的エンパワメント」は、孤立していない高社会階層の人において、かなり低い (Brian D Christens, Paul Speer, N. Andrew Peterson, 2011) (Figure 2)。

### III 国内の研究動向

Sarason (1974), McMillan & Chavis (1986) の研究にもとづいてコミュニティ感覚尺度が作成された (植村 2012)。例えば、コミュニティ感覚の高さと人生の満足感や主観的幸福感の高さ、および孤独感の低さの間には正の相関があることがわかっている (笹尾 2007)。

国内におけるコミュニティ感覚の研究は、日本と他国の国際比較の研究、大学生の大学教育とコミュニティ感覚に関する研究、職場におけるコミュニティ感覚に関する研究など多岐にわたっている。

国内の研究者による国際比較の研究では、池田 (2006)、高橋・森田・石津 (2010) の研究等がある。池田 (2006) は、「大学生の心理的コミュニティ感覚：日本と韓国の異文化間比較」において、心理的コミュニティ感覚 (PSOC) は、McMillan & Chavis (1986) が4因子構造の尺度を作成以降、主として欧米文化圏内で盛んに研究が行われている。しかし文化的コンテクストの違いが PSOC に与える影響については従来ほとんど研究されていなかった。そこで日本と韓国の大学生を対象とした比較文化研究の視点から、1) POCS に異文化圏における因子的妥当性、2) 文化的価値観の一側面である集団主義傾向、および民族アイデンティティと PSOC との関連の二点について検討を行った。確認的因子分析の結果、両



国とも McMillan & Chavis (1986) が 4 因子構造は妥当であり、PSOC が文化を超えて適用可能な概念である可能性が示唆された。しかし両国の大学生が示した文化的相違は回答者が感じているコミュニティ感覚と強く関係があり、文化的に根ざした PSOC 研究な重要性が示された。高橋・森田・石津 (2010) は、「集団主義とコミュニティ感覚がメンタルヘルスに及ぼす影響—日・中・韓の国際比較を通して—」について考察している。高橋らによると、「日本の社会人は韓国と同等程度に集団主義傾向があり、中国や韓国よりもコミュニティ感覚が乏しいことが示唆された。」と述べ、また「集団主義については、コミュニティ感覚やメンタルヘルスとの関係において、一貫した関係性は認められなかった。つまり、集団主義という社会レベルの概念が直接的に個人のメンタルヘルスに影響するとういことは見出されなかった。」と述べている。

大学生の大学教育とコミュニティ感覚に関する研究では、福島・鶴養 (2013) は、Sarason (1974)、McMillan & Chavis (1986)、植村 (2012) の研究をもとに、地域に対してさらに具体的・主体的な態度を測定する「地域コミュニティに対する態度」尺度を作成した。これは「住みよい地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい」など、大学生も考えやすい項目になっている。その結果、福島・鶴養 (2013) は「臨床心理行政論」の講義を通して、受講生の地域コミュニティに対する態度が向上することを報告した。玉井・笹尾 (2014) は ICU の平和教育と教育環境としてのコミュニティ感覚の関連性の検討を行っている。それによると、平和教育の機会と学生の他国民・他民族に対する感情、平等意識は関連しているが、大学へのコミュニティ感覚が高いことが重要であり、教育環境としてコミュニティ感覚を高めることが平和教育にとって重要であることが示唆された。井上・久田 (2015) は大学生における所属大学へのコミュニティ感覚について検討している。大学生の所属大学へのコミュニティ感覚の高低には入学時の志望度や教員からのサポートが比較的大きく関与していることが示唆された。また、授業に対する満足度や課外活動へのコミッ

トメントの度合いも影響している。したがって、大学側としては、学生の中退予防やメンタルヘルスの維持・向上に関して、これらの要因を充実させていくことが一つの指針となるであろう。

職場におけるコミュニティ感覚の研究に関連したものには、山本・服部・中村ら（2002）の研究がある。この研究は看護師用職場コミュニティ感覚尺度の作成と、ストレス反応との関連を明らかにすることを目的で、病棟に勤務する看護師 678 名を対象に調査を実施している。先行研究においてコミュニティ感覚尺度に示された内容を含む 32 項目によって因子分析、主成分分析を行い、下位尺度ごと項目を設定した。その結果、「同僚への信頼感」「職場志向性」「良好なコミュニケーション」の 3 下位尺度 28 項目からなる看護師用職場コミュニティ感覚尺度が作成されたと述べられている。このコミュニティ感覚尺度の得点とストレス反応尺度による得点間の相関を見たところ、両者のすべての下位尺度間に高い負の相関があることが報告された。

その他、1980 年代から 1990 年代の女性運動に参加した女性たちの語りをもとに、社会変革を可能にした女性たちのコミュニティ感覚の特徴を明らかにしている。運動体の担い手としての女性たちは、「女性運動家」である前に「生活者」であり、「生活者」の視点から社会変革を目指し、それが結果的に「女性運動家」につながったと考えられる。コミュニティ感覚への注目は、その他の運動体コミュニティのライフサイクルを考える上でも有用であろう（中川 2013）。

#### IV まとめ

コミュニティ感覚の定義は Sarason によってなされ、コミュニティ心理学の発展に貢献した。その後、心理学者はコミュニティ感覚の多くのモデル開発し、コミュニティ感覚尺度を考案した。しかし、個人とグループ経験に強く影響するコミュニティ、社会的現象を無視している。

Sarason の定義や尺度に修正が加えられていった。海外ではさまざまな研究が行われている。比較的メンバーの数が少ない小さなコミュニティにおいてコミュニティ感覚が高いこと、またコミュニティでの居住年数や関わり長さなどの時間的要因もコミュニティ感覚に影響することが報告され、さらにはコミュニティにおける人種・民族的状況、居住形態、所得レベル、年齢や教育歴、人格特性などとコミュニティ感覚との関連も認められている。その他に、コミュニティ感覚の高さが職場での満足度の高さと、役割葛藤の低さと関連していることなどが挙げられる。

本文献レビューでは、Paul Speer とその共同研究者らの研究を紹介した。これらの研究は日本ではあまり目に触れない。年代順に紹介し、研究動向を整理した。Paul Speer らの研究の特徴は大規模な現地調査であることが分かった。まさにダイナミックな調査研究を展開していて、コミュニティ心理学者らしさが窺われた。Paul Speer らの研究からコミュニティ感覚に関連する個人差変数については、あまり検討されていないようであった。Paul Speer らの研究から「心理的エンパワメント」という性格ないし信念は、コミュニティ感覚に関連しているとみているということが分かった。

また、国内の研究動向は Sarason (1974)、McMillan & Chavis (1986) の研究にもとづいてコミュニティ感覚尺度が作成された (植村 2012)。例えば、コミュニティ感覚の高さと人生の満足感や主観的幸福感の高さ、および孤独感の低さの間には正の相関があることがわかっている (笹尾 2007)。その他に、国内におけるコミュニティ感覚の研究は、日本と他国の国際比較の研究、大学生の大学教育とコミュニティ感覚に関する研究、職場におけるコミュニティ感覚に関する研究など多岐にわたっている。

なお、Hombrados-Mendieta, Dominguez-Fuentes, Garcia-Leiva, & Gomez-Jacinto (2013) や笹尾 (2007) の研究から国内外ともにコミュニティ感覚の高さと人生の満足感の高さに正の相関があると報告され、その重要性が示唆された。

今後、筆者は国内外のコミュニティ感覚の研究動向を踏まえ、傾聴体験がコミュニティ感覚に与える影響についてさらなる検討を重ねていきたいと考えている。

引用文献

- N. Andrew Peterson, Paul Speer 2011  
Community Participation and Psychological Empowerment: Testing Reciprocal Causality Using a Cross-Lagged Panel Design and Latent Constructs  
University of Wisconsin-Madison, WI 53706, USA. *Health Education & Behavior*, 38(4): 339-47.
- Brian D Christens, Paul Speer, N. Andrew Peterson 2011  
Social class as moderator of the relationship between (dis)empowering processes and psychological empowerment. *Journal of Community Psychology*, 39(2), 170-182
- Chavis, D.M., Hogge, J.H., McMillan, D.W., & Wandersman, A. 1986  
Sense of community through Brunswik's lens: A first look. *Journal of Community psychology*, 14 (1), 24-40
- Chavis, D.M. が主宰するウェブサイト  
([http://www.senseofcommunity.com/files/Sense%20of%20Community%20Index-2\(SCI-2\).pdf](http://www.senseofcommunity.com/files/Sense%20of%20Community%20Index-2(SCI-2).pdf))
- Dalton, J.H., Elias, M.J., & Wandersman, A. 2001  
Community Psychology: Linking individuals and communities. *Wadsworth*.
- Douglas Perkins, Joseph Hughey, Paul Speer 2002  
Community Psychology Perspectives on Social Capital Theory and Community Development Practice. *Journal of the Community Development Society*, 33(1).
- 福島里美・鵜飼美昭 2013 臨床心理行政論の授業が女子大学生の地域コミュニティに対する態度に及ぼす影響 コミュニティ心理学研究、17(1), 46-62.
- Hombrados-Mendieta, M.I., Dominguez-Fuentes, J.M., Garcia-Leiva, P., & Gomez-Jacinto, L. 2013. Sense of community and satisfaction with life among immigrants and the native population. *Journal of Community Psychology*, 41(5), 601-614.

- 池田満 2006 大学生の心理的コミュニティ感覚：日本と韓国の異文化間比較（教育心理学） 国際基督教大学学報、I-A、教育研究 48, 151-160.
- 井上麻衣・久田満 2015 大学生における所属大学へのコミュニティ感覚 —測定尺度の開発と要因の検討— 上智大学心理学年報、Vol 39, 53-60.
- Joseph Hughey, Paul Speer, N. Andrew Peterson 1999  
Sense of community in community organizations: Structure and evidence of validity. *Journal of Community Psychology*, 27(1), 97-113.
- Joseph Hughey Paul Speer 2002 Community, Sense of Community, and Networks.
- Lindsay A. Wilke, Paul Speer 2011 The mediating influence of organizational characteristics in the relationship between organizational type and relational power: An extension of psychological empowerment research. *Journal of Community Psychology*, 39(8), 972-986.
- McMillan, D. W. & Chavis, D. M. 1986 Sense of community: A definition and theory. *Journal of Community Psychology*, 30, 23-43.
- 中川浩子 2013 女性運動に参加した女性たちのコミュニティ感覚と世代継承性について —「生活者」としての女性たちの語りをととして— コミュニティ心理学研究 17(1), 15-30.
- N. Andrew Peterson, Paul Speer 2000 Linking Organizational Characteristics to Psychological Empowerment. *Administration in Social Work*, 24(4), 39-58.
- N. Andrew Peterson, Paul Speer, Joseph Hughey 2006  
Measuring sense of community: A methodological presentation of the factor structure debate. *Journal of Community Psychology*, 34(4), 453-469.
- N. Andrew Peterson John B Lowe Joseph Hughey Robert J. Reid Marc Zimmerman Paul Speer 2007 Measuring the Intrapersonal Component of Psychological Empowerment: Confirmatory Factor Analysis of the Sociopolitical Control Scale. *American Journal of Community Psychology*, 38(3-4): 287-297.
- N. Andrew Peterson, Paul Speer, David W. Mcmillan 2008  
Validation of A Brief Sense of Community Scale: Confirmation of the principal theory of sense of community. *Journal of Community Psychology*, 36(1), 61-73.
- N. Andrew Peterson, Paul Speer, Joseph Hughey Theresa L. Armstead John E Schneider Megan A. Sheffer 2008 Community Organizations and

- Sense of Community: Further Development in Theory and Measurement. *Journal of Community Psychology*, **36**(6), 798-813.
- Obst, P., Smith, S., & Zinkiewicz, L. 2002 An exploration of sense of community, part Dimensions and predictors of psychological sense of community in geographical communities. *Journal of Community Psychology*, **30**(1), 119-133.
- Paul Speer, Joseph Hughey 1996 Mechanisms of Empowerment: Psychological Processes for Members of Power - based Community Organizations, *Journal of Community & Applied Social Psychology*, **6**(3), 177-187.
- Paul Speer 2000 Intrapersonal and interactional empowerment: Implications for theory. *Journal of Community Psychology*, **28**(1), 51-61.
- Paul Speer, N Andrew Peterson, Theresa L Armstead, Christopher T Allen 2012 The Influence of Participation, Gender and Organizational Sense of Community on Psychological Empowerment: The Moderating Effects of Income. *American Journal of Community Psychology*, **51**(1-2).
- Pretty, G.M.H., Andrewes, L. & Collett, C. 1994, Exploring adolescents sense of community and its relationship to Loneliness. *Journal of Community Psychology*, **22**, 346-358.
- Royal, M.A. & Rossi, R.J. 1996 Individual-level correlates of sense of community: Findings from workplace and school. *Journal of Community Psychology*, **24**, 395-416.
- Sarason, S.B. 1974 *The psychological sense of community: Prospects for a community psychology*. San Francisco: Jossey-Bass.
- 笹尾敏明 2007 コミュニティ感覚 日本コミュニティ心理学会(編) コミュニティ心理学ハンドブック、115-129. 東京大学出版会.
- 高橋美保・森田慎一郎・石津和子 2010 集団主義とコミュニティ感覚がメンタルヘルスに及ぼす影響 一日・中・韓の国際比較を通してー 東京大学大学院教育学研究科紀要 **50**, 159-179.
- 玉井航太・笹尾敏明 2013 ICUの平和教育と教育環境としてのコミュニティ感覚の関連性の検討 教育研究 **55**, 105-120. 国際基督教大学教育研究所.
- 植村勝彦 2012 現代コミュニティ心理学 東京大学出版会.
- 山口桂子・服部淳子・中村菜穂・山本貴子・小林督子 2002 看護師の職場コミュニティ感覚とストレス反応 一看護師用コミュニティ感覚尺度の作成を中心にー Vol. 8, 17-24. 愛知県立看護大学紀要.